成人映画

3

成人映画・目次　　第2巻第3号

■カラー・ピン・アップ／新高恵子

■グラビア特集
女優／佐川啓子……3
今月のスクリーン・ハイライト／新作紹介……6～9 43～49

■読みもの
特別企画／近ごろ話題のピンクなおハナシ……10

「幸福」について考えること……14
ある日ある時／素顔の女優さんたち……17
シネマＹ談……19
Ｙ談風土記……21
セクシー女優／くちびるの美学……22
クローズ・アップ／新高恵子……26
その時マバタキしないで……鈴木和夫……27
ミスター陳のピンク女優寸描……野末陳平……28
ピンク映画みたまま……佐藤重臣……30
プロダクション・ニュース……31
ピンクこばなし……32
ズバリ発言／人間不在を反省しょう……新藤孝衛……36
映画界の話題……34

アンケート特集／ピンク女優が寝るとき……38
マンガ……上田一平……33

●表紙／谷口朱里
さょ年「密戯」でデビューして以来1カ月1本の割りで仕事をしている売れっ子。前向きに前進しようとする態度は貴重。お色気も増して一段とセクシーになってきた。24才。

●ピン・アップ／新高恵子
65年は年間17本という忙しさ。ことしは作品的にいいものを選んで演技力を養いたいという。珍らしいほど素直ですべての点に懸命さがみられる。66年最大の有望株。26才。

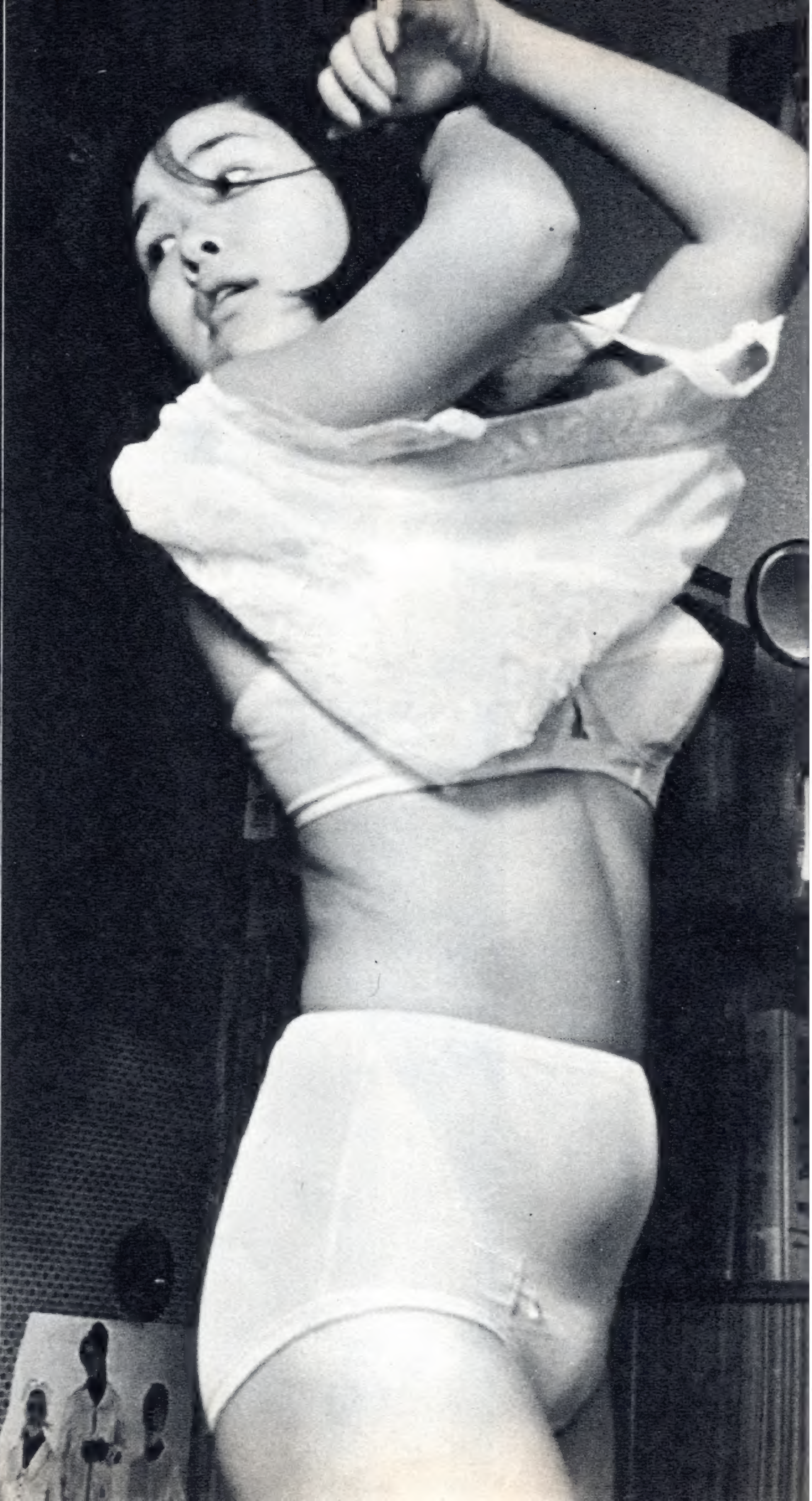
♥新高恵子

成人映画・3月号・ピンアップ

本誌特写

♥女優

佐川啓子



女優

「エロ事師たちより、人類学入門」(今村昌平監督作品)の〝恵子〟役として、全国三千人の候補者の中から抜擢された佐川啓子(16)は神戸っ子である。いま大阪でスタッフと一緒に合宿生活を送りながら〝恵子〟にとりくんでいるが、未成年なので今村作品には一度もお目にかかったことがないという「ユートー生」。ところがそこはモンキーダンスを踊るとスカッとするという現代っ子らしく、父親のぼくに色目を使ったり、カンケイしてしまうシーンでは母親の坂本スミ子も舌をまく割切りぶりを披露。この分では〝第二の吉村実子〟が今年中に生れそうだが、本人は〝俳優なんて……〟と赤い舌をペロリ出した表情はアドケなく、可愛いかった。

(小沢昭一)

★今月のスクリーン・ハイライト

よろめき

（関東ムービー）

監督・石山　堅　主演・城山路子

老境の画家と若く美しい妻（城山路子）バイオリニスト志望の娘（工藤那美）との平和な家に、一人の青年が姿を現わしたことから愛と欲望がからみ憎み合うようになってゆく。

肌が知っている（新幸プロ）

監督・黒川文男　主演牧　和子

よしえ（牧和子）は多摩川堤で二人の何者かの男によって暴行される。迷宮入りした事件は意外な方向に走るが、「あの夜のあの男は私の肌だけが知っている」と彼女はいった。

夜まで待てない（関東ムービー）

監督・経堂一郎
主演・谷口朱里

男はすべて昼は淑女で夜は娼婦のごとき女性に惹かれる。欲望と愛情の激流に押し流されてゆく男。女性心理を鋭く追求している。

浮気契約（大蔵映画）

監督・経堂一郎　主演・谷口朱里

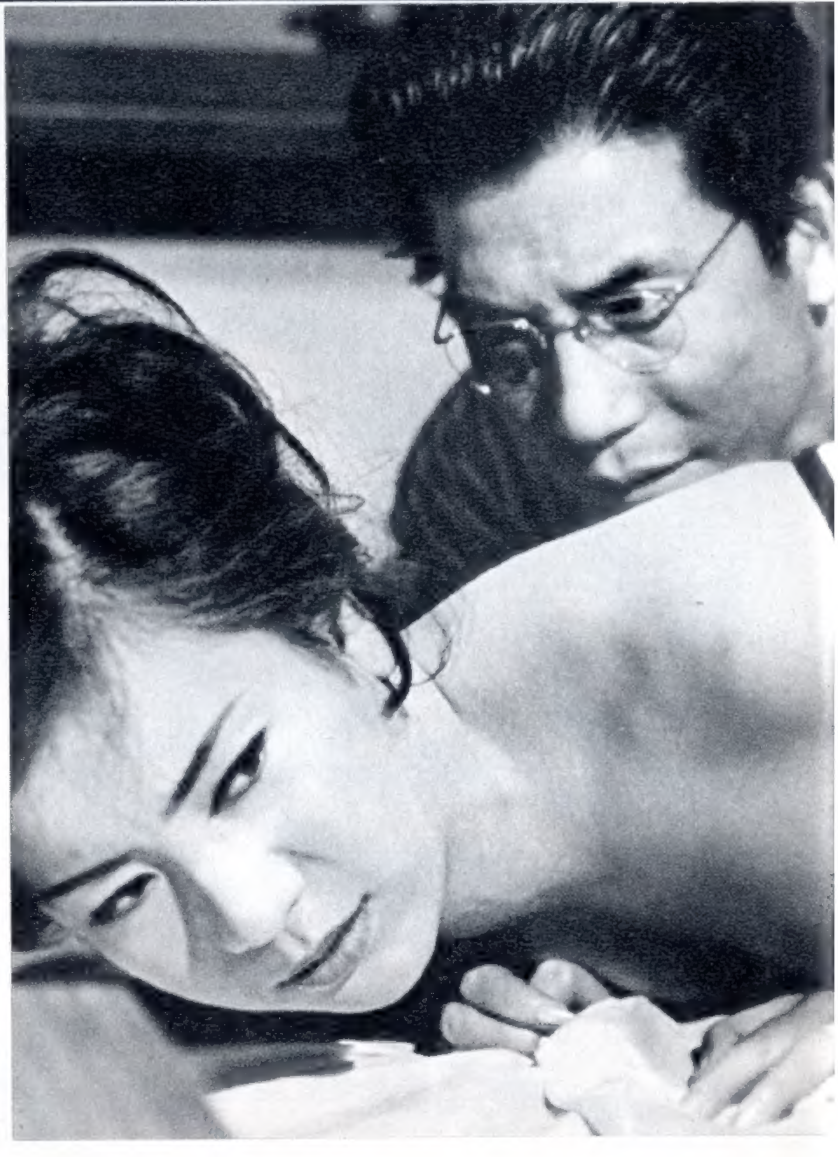
精力的な活動家である夫は性的不能者だった。若くて美貌な妻（谷口朱里）は欲求不満になり不倫な情事におぼれてゆく。不能の夫を持った妻の苦悶と女の悲劇を描いている。

嵐の女体

（大蔵映画）

監督・小川欽也
主演・美矢かほる

富子（美矢かほる）は冷たい夫（鶴岡八郎）に満たされず欲求不満だった。夫の愛情に飢えた妻が他の男性と肉体関係に陥ってゆく過程を描いている。



女・三百六十五夜

（明光セレクト）

監督・高木丈夫　主演・新高恵子

ユキ（新高恵子）は愛を求め、男の愛撫に身を投げ出してゆくが、男達はいつもユキを悲しい思いにして去ってゆく。新高恵子が珍らしく主題歌を唄う。

◆近ごろ話題のピンクなおハナシ

映画「女犯破戒」と「二股をかける女」より

「女犯破戒」での三原葉子

★女犯破戒

「成人映画」はやめましたと発表した松竹の後退ぶりにくらべて、「うちは不良性感度で行く」とハナ鼻の荒いのが東映。「四畳半物語・娼婦しの一」につづいて、いま撮影中なのが、東映京都の「**女犯破戒**」(にょはんはかい)。脚本の段階で、映倫から三十余カ所も要注意のチェックをされている。この映画は東映が積極的に打ち出した文芸好色路線の第二弾。五代目菊五郎がとりあげた〝日月星享和政談〟をテーマに、色欲にうえた大奥の女中たちが日蓮宗谷中の延命院を舞台に、住職の**日当(田村高広)**を金で買い交わりを続けるが、この日当がこれらの交わりを利用して大僧正の位を狙うという破戒僧の女性遍歴のものがたり。

なにしろ田村が**小川真由美**、**三島ゆり子**、**大原麗子**、**三原葉子**、**楠侑子**、**宮園純子**、**内田高子**という七人の美女とつぎつぎ濡れ場を演じているのだから、まさに男優ミョウリに尽きようというものだ。

好色路線にふさわしい、息づまるようなお色気場面を連日展開しているが、メガホンをとるのが、一昨年来「大殺陣」など集団アクションものを手がけてきた工藤栄一監督。愛欲の場面の連続にさすがチョッピリ戸まどい気味。

「一週間に三つのラブ・シーンを撮ったが参りました。仕事を終えて家に帰っても目の前にチラチラするものがあるんですよ」といいながらも「新しい路線にふさわしい映画にしますよ。女優さんはベテラン揃いだけに大へん楽しくハッスルしています。とにかくコクのある映画にします」と美女に囲まれて大張り切り。そんな中で撮られたのが大奥の女中、三原葉子と内田高子の激しい愛欲場面であった。このシーンは、生存競争の激しい大奥の一室で、お互いに敬遠し合い愛欲にうえる女中たちが、自からの体をもてあまし、身分の低い女中を連れ込んで同性愛にふけるというくだりだ。お色気では定評のある三原とピンク女優NO1の内田高子の同性愛シーンというので、セット内は異様なふん囲気が漂う。さすがにこの二人のベテラン女優もこの日ばかりは困った表情で「女同志なんて初めてだし、イヤーな感じ」と尻ごみする始末、そこで監督自から指導に乗り出し、熱っぽい演技をくりひろげて監督を満足させた。

一方、将軍に愛撫されるシーンでは将軍に俳優座の舞台で悪徳役をやっている菅貫太郎と、豪華なクジャクの羽根で局部に愛撫をうけることを最高の喜びとして進んで将軍の胸もとに飛び込んでゆく女中が、バーのマダム役などで売り出している楠侑子。どちらも舞台を踏んだ演技派とあ

「女犯破戒」で日当を演ずる田村高広と女たち

って、これまた体当り。背中や、胸をクジャクの羽根でなでられる楠は、笑いをこらえるのに懸命であった。

戒律を破り女をダマし続けた日当の前に、過去に愛した女とウリ二つのお慎（小川真由美）が現われ、稀代の破戒僧だったことを悟るくだりがある。

小川は現代の悪女スターと異名を持っており、初の時代劇とは思えぬ熱っぽい演技を示し、一段と迫熱したセット風景をみせている。

ところで映倫との間でモメ続けた脚本もかなり修正させられたが、なるほどクレームがつくのは当然と思えるようなシーンがある。

そのシナリオの一部を紹介すると……

★　★

おきん（三島ゆり子）は泣き濡れて日当の膝にすがりつく。黙然と動かない日当。おきん、人形を抱くように頬ずりして

おきん「ああ……抱いて！…めちゃくちゃにして！」

もどかしかげに帯を解き、豊満な胸をはだける。日当、いきなりその白い肌の中に顔を埋める。快感にのけぞるおきん……襲ってくる感動の余波に、白い裸身を慄わせむせび泣くおきん。

延命院日当の部屋

おこう（大原麗子）の帯がくるくると解け、その端を押えた日当がうすら笑いをうかべる。

日当「おこうさん、あなたは可愛いい、まるでコマのようだ！」

ひぢりめんの裾をなびかせ、日当の腕の中に飛び込み―接吻をする。

おこう「……嬉しい」

おこうを抱きすくめる。

日当「…おこうさん は、初めてですね」

おこう「え…？」

日当「男女の交わりは厳粛なものです」

「女犯破戒」での内田高子（左）と三原葉子

おこう「（日当の胸もと深く抱かれ）…暖かくって…暗くって…お母さんのお腹の中にいるみたい」

日当おこうの体をまさぐり、濡れた唇がおこうの白い太ももをはう。おこう苦悶に似た表情を浮べ観喜に堪える――

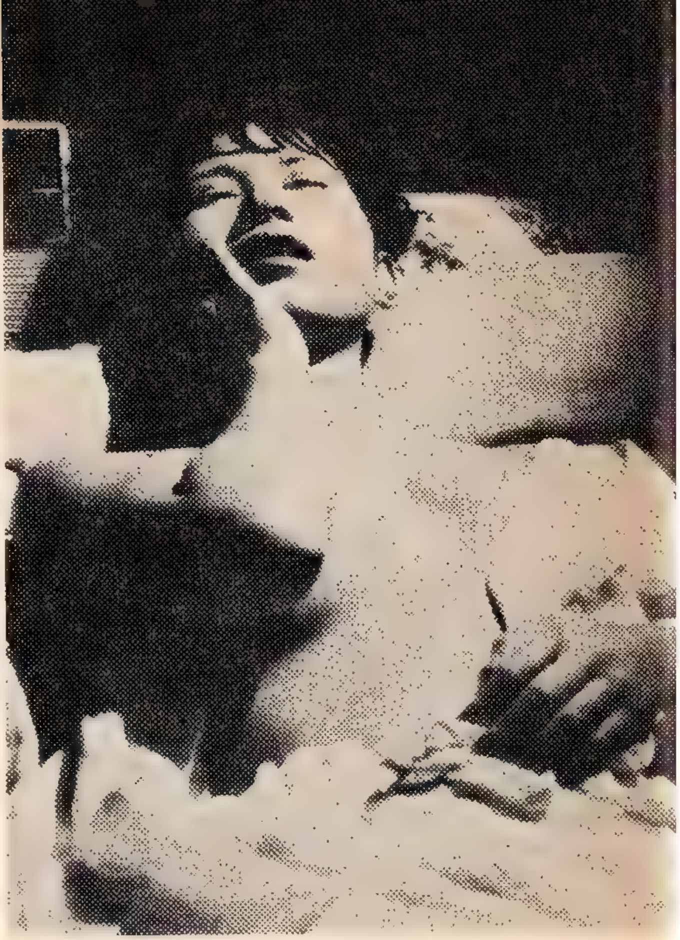
★　★

ざっとこんな描写がいたるところにある。それも〝激しく抱擁する〟〝抱擁のなかに恍惚の眼を閉じ〟とか〝やるせなく乳房を抱きしめる〟といった具合で、その妖しいエロティシズムが一ぱいである。まさに〝好色路線〟〝文芸エロ路線〟というにふさわしい作品内容なのである。

こうした東映の一連の作品があいついで登場するとなればこれはかなり興味のあることだ。

★二股をかける女

ピンク映画ばかりか、邦画五社の作品にも足をのばして



「二股をかける女」での内田高子

活躍している内田高子が、こんどは自分でプロデュースし主演する作品に取り組んでいる。なんともその勢いあたるべからず――といったところ

映画は「二股をかける女」で、監督は向井寛。彼女がデビューしたのがやはり向井監督の「肉」だったところから「あたしを映画界で生きる口火をつけて下さった監督さんに――」と、彼女自身の製作なところから向井監督にメガホンを依頼したもの。なかなか義理堅いところは大いに買ってやっていい。

製作は彼女をネグリジェ歌手として育て歌の指導をしてくれ、映画女優に転身させた作曲家の岡雅美氏。岡プロダクションを作っての第一回作品。痩せても枯れても女優がプロデュースして主演するのは例の岡田茉莉子についで二人目。配給はすでに大蔵映画（OPチェーン配給）に決まっている――という手回しのよさ。

「まあ三百万円の製作費ですけど、これを一つの足がかりとしていい作品を作ってゆきたいのよ」

と内田高子は撮影現場で、上半身ハダカのスタイルでニンマリと笑った。

その撮影現場というのが、千駄ヶ谷駅に近い、千駄ヶ谷マンションの一室。最近よくここのホテルが撮影に使われている。二階の隣り合わせでAプロとBプロがそれぞれ撮影しているときがよくある。

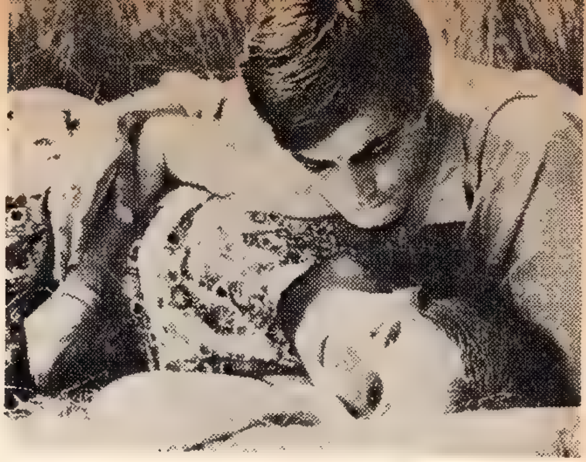
「二股をかける女」はある女優がセックスの相手として、若いシナリオライターを養っているが、ライター氏がいたたまれず、そこを飛び出し、車中、女優とウリ二つのバーのホステスとめぐり合う。二人は結ばれ愛し合うが、女にはヒモがいて、はじめて知った恋を捨てねばならない――という悲恋もの。いかにも女優プロデューサーらしい物語。

きょ年二十七本も出演しただけあって彼女は貫録さえ出てきた感じ。「あたしのプロデュースだから、思いきったところをやるわよオ」

その思い切ったところは、きっとハダカとベッドシーンの凄い奴であろう。

ピンク色のガウンの下にはブラジャーもつけず（その下の方は不明でした）憶面もなく脱いだりしながら、文字通りプロデュースと女優の〝二股をかける女〟ぶりをみせていた。

打合わせをする内田高子と向井寛監督



Le
Bonheur

映画「幸福」を見て考えること……

★幸福のある側面

ひまわりが真黄な花びらを太陽に向けてウインクし、空からはそれにお返しをするようにさんさんと陽光が輝いているある初夏のこと。森の一隅ではフランソワとテレーズの若い夫婦が、ちょうど昼寝から目ざめたところ。すぐそばにはジズーとピエロの姉弟が、まだすやすや眠っている。陽は次第に傾きかけている。

　やがて親子四人はつれだって家路へ向かう。今日の日曜も静かに、平和に幕をとじようとしている。明日からはまた、いつもと同じ勤勉な日々が再会される。

　この親子はパリの郊外の団地に住み、夫は叔父の木工場に通う建具職人。勤勉そのものの毎日で、休日には家中をピクニックにつれていき、普段は子供のオモチャ作りに熱中するほか、何一つ道楽もないという模範亭主。妻君のほうも昼間は洋裁のアルバイトで家計を援け、子供の育成と夫への献身以外に目もくれないという優等生ぶり。

　夜は二人だけで愛を確かめ合い、ますますお互いの愛を深めていく――全く理想的な一家で、これこそ〝幸福〟の典型ともいえるし、当人たちも自分たちは幸福だと認じている。

★投げられた波紋

　しかし、これだけではおハナシにもなんにもなりっこない。だがここに一つの波紋が生じる。それはフランソワに愛人ができてしまうのだ。近くの町にある郵便局で偶然顔を合わせた娘エミリーがそれである。しかも彼女は転任でフランソワが住むフォントネの町に住むようになった。そこでフランソワは彼女のアパートへ行って、本棚や戸棚を作ってやるが、次第に彼女の魅力にひかれ、同時に彼女も

彼を忘れられなくなり、いつしか二人はベッドを共にするようになってしまう。

普通ならここでフランソワが、何かしらの形で悩むのだが、彼は違う。妻への裏切りなどまるで感ぜず、むしろ幸福が二つになったと、以前にまして人生の楽しさを謳歌するんだから、全く幸福な男というほかはない。

しかし、さすがに妻に黙っていてはいけないと、あるピクニックの午後、一切を妻君に話す。と、妻君少しも怒らず曰く――「あなたさえそれでいいなら、私はかまわないわ…」ときちゃうんだから、フランソワでなくてもびっくりする、と同時に胸なでおろすのは当り前だろう。

★一つの幸福は消えて…

ところが、安心して眠ってしまったフランソワが起きてみると大変。妻君の姿が見えない。不吉な予感に探しまわると、なんと彼女は溺死体となって現われた。自殺か？　事故死か？　その真相はもう問うすべもない。

フランソワは悲しんだ。近所の人々も悲しんだ。とりわけエミリーは悲しみ、彼をなぐさめると共に、子供たちの面倒をなにくれとなくみてくれる。いつしか子供たちは彼女になつき、フランソワも悲しみを忘れていく。そして、久しぶりに一家で森へピクニックに行く。親子四人で――もちろんエミリーが加わった四人だ。四人とも仲よく手をつなぎ、幸福そうな顔をしている。知らない人がみたら、少し前に彼の妻、子供たちの母が死に、新妻が出現したなどとは、全く分らないような幸福な四人の姿。ただ一つ変わっているのは季節だけで、あの初夏の日はなく、森の樹々は燃えるように紅葉し、秋たけなわを告げている。

★身近から得た題材

以上は、過去に「五時から七時までのクレオ」という作品を作った、フランスの女流監督アニエス・バルダの新作「幸福（しあわせ）」のストーリーである。そしてごく単純で、日常的な物語の中に＜幸福＞の正体を鋭く追求したものとして、六五年度のルイ・デリュック賞、ベルリン映画祭審査員特別賞を受賞している問題作である。

さて、この映画が何故問題作かというと、ごくごく身近なところから題材を得、しかもそれを鋭敏に料理しているからである。＜幸福＞あまりにもありふれた言葉でありながら、あまりにも漠然とし、また曖昧な言葉。それだけに我々は、不用意に日常生活の中でこの言葉を乱用し、真の＜幸福＞が何か――ということには、とかくに無関心ではあるまいか……。

アニエス・バルダは、「この作品で私は、〈幸福〉のある側面を描いたにすぎない」といっているが、果たしてこの登場人物五人は本当に幸福だったか——、それは誰にも分るようでいて、誰にも分らない。たしかに妻テレーズを除けば、主人公フランソワは二つのうち一つの幸福を失ったが、新しい一つの幸福がある。子供たちも一つを失ったが、また一つの幸福を得た。エミリーも一つの幸福を得たが、テレーズはどうだろう。死は彼女にこれまでの幸福に告別を告げさせた。しかしテレーズは幸福だったのだろうか？ 夫に愛人ができたときかされたとき、すでに近づく不幸を察して、いち早く幸福の絶頂で死を選んだ、ともいえよう。そうなれば、死はかえって永遠の幸福へのかけ橋ともいえなくはない。しかしそれもこれも、テレーズにしか、その真意は分らない。他の四人にしても、一応幸福そうだが、その真意は他の人には誰にも量り知れない。

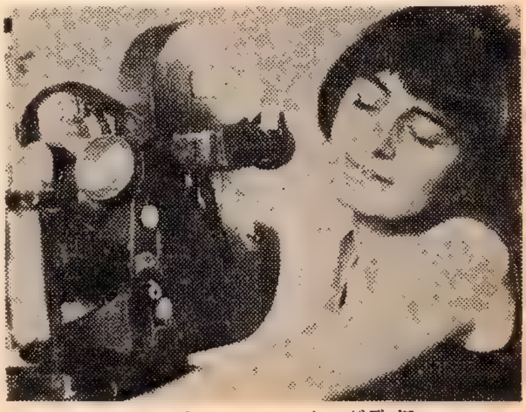
となると、やはりこれはある側面の描写であり、幸福とは謎、ともいえよう。が、身近なところから得た題材で、こんなに大きな問題を投げかける作品も他にはちょっとない。ということは、題材などは身近なところにいくらでもある——しかし、その選び方料理の仕方で、一切の勝負がつけられる、という好見本ともいえよう。

★色彩と役者のすばらしさ

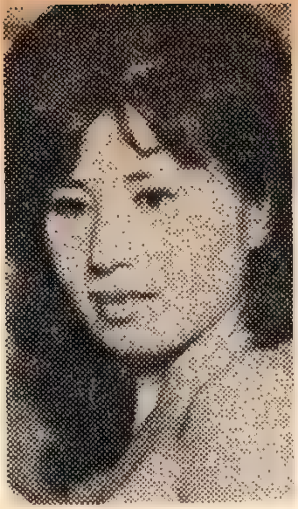
印象派の絵画にヒントを得たという、バルダ監督の言葉にもあるように、その画面の美しさたるや、最近他に類を見ないものがある。従って男女の愛の交換シーンも、そのエロチシズムが完全に美化され、少しの嫌らしさも感じさせない。

さらに、若い夫婦に扮するジャン・クロード・ドルオーとクレール・ドルオーは実生活でも夫婦であり、一人の子供も彼ら夫妻の実際の子供。正に家族そろっての出演だがそのイキの合った演技たるや目を見はらせる。ここで考えさせられるのは、彼らに演技の素養があったことも事実だろうが、やはり監督の演出力、また演技者の努力も大いにかわねばならないということである。

題材の貧弱さ、画面のきたなさ、演技の貧困、演出不在等々——最近の日本映画界、とくにピンク映画といわれるものの中には、そのひどさには目をおおいたくなるような現状であるが、ひとつ製作者から、ほんの仕出し役の人まで、「題材不足」、「役不足」、「材料不足…」なんていうことばかりに責任をおしつけず、こうしたよい例があるのだから、ぜひ作品を見た上で、大いに反省してもらいたいものである。〃なせばなる！〃は大松さんだけの専売特許ではないと思うのだが——。


アニエス・バルダ監督

可能かづ子


内田　高子

志摩みはる

橘　桂子

ある日ある時
素顔の女優さんたち

銀座にある編集部は、狭いながらも銀座という足場がよいせいか訪れる女優さんも数を増して来た。そこで素顔の女優さんを浮き彫りしてみよう。

お隣りさんが国映という場所柄、一番顔をみせてくれるのが**橘桂子**さん。長い髪をなびかせ、監督などをつかまえては「私はこういう企画で、こんなものをやりたいわ」などと意欲的な人だ。昨年の夏自然のままのワキ毛を見せ、「私、外人みたいにワキ毛を茶色に染めようかしら…」などと茶目っ気がある。そんな彼女も川崎でバー〝ケイ〟を経営している。

次に「ちょっと銀座まで来たので寄ってみたの」といつも楽しそうな顔を見せてくれるのは、**志摩みはる**さん。39年に国映の「裸虫」で大須賀美春でデビューし、のちに志摩みはると改めた。「私のことみんな、フー子とかデブちゃんなんて呼ぶの、イヤになっちゃうの」と笑いながら話すフー子ちゃん。この人は実に気持がおおらかで、囲りの人達を楽しくさせてくれる。

「お早うございます!!」と意勢よく入って来るのは**内田のお高さん**。この人ほど明るい人はまず見当らない。撮影の現場に行っても、普段逢ってもイヤな顔をみせたことがない。お高さんとの付合いは国映の「肉」のロケからだから一番古い。先日も彼女がプロデュースした大蔵作品「二股をかける女」の現場に行った。強行スケジュールの中で元気なお高さんの姿をみて安心した。

ある時は少女の如く、ある時は淑女の如く現われるのが**可能かづ子**さん。この人ほど、ドレスアップして変る人はいない。先日も国映の営業部長から小犬の人形をもらい子供のように喜んでいたのはよいけれど、私の机の上に大切なオヤツを置いておいたら、素早くみつけ、口に一つほうばり、手に二つもって「おつかれさまァ」とおおきな目をクリクリさせて帰っていった。なんとも憎めない人だ。

こんな反面、英語はペラペラで、この人と話していると頭デッカチで、観念の空回り（怒らない、怒らない）でなにがなんだかワケの解らない理論をぶつけてくることもある。それが、また可愛いという人もいるが、一度ゆっくり話合ってみたいといつも思っている。こう並べてみると、五社系の女優さんとちっとも変らない。むしろ、のびのびして自分なりに割りきって仕事に取り組んでいる態度をみて、この人達こそ独立プロを担う役割が課せられているのだと思う。（川島のぶ子）

＜懸賞＞「セクシー女優クイズ」この女優は誰？

さてこのシャワーシーンは誰でしょうか？　ピンク映画女優ならノー・ブラジャーでも屁のカッパだが、五社系ではきわめて勇気のいることです。このシーンを大胆にやつてのけた彼女は、ひところ、いろいろ話題をにぎわしました。さて、なんという女優さんでしょうか。正解者10名に本誌特写によるグラマー女優のピンク・ムード写真３枚を贈呈します。▶第１ヒント＝東宝の女優です▶第２ヒント＝ある監督と恋仲がうわさされています。住所、氏名、年令、職業を明記のうえ、東京都中央区銀座東六ノ四　村木ビル五階現代工房「成人映画」編集部あて。締切３月31日。発表は賞品発送をもつてかえます。

♥シネマY談・あんなハナシ こんなハナシ とにかくハナシがいっぱい

現代の英雄・若松孝二・週刊文春から

「週刊文春」の2/28号に若松孝二監督が〃現代の英雄〃としてグラビア三ページに掲載されている。監督のサングラスに映った男女のベッドシーンをとらえて、なかなか素晴しい表情。おそらく、若松監督がこのくらい男前にとられたのもザラになく、周囲から「カッコいいよ」といわれて「今晩一ぱいやっか―」と若松監督まんざらでもないカオ。詩人の寺山修司が〃道徳のゲリラ〃といい、彼の映画を支持するつもりである―と書いている。

★

新高恵子がつねにハンドバッグの中にチーズを数箇入れている。そのいい分によると「忙しいので、食事がおくれたり、徹夜になったりするので食生活が乱れるでしょ。だから栄養補給もできないことが多いので、こうやって、チーズを持って歩いてんのよ。ヒマをみてはモグモグやってるけど、カラダにいいようよ」

チーズ一切れは牛乳二十本分にあたいするというほど栄養価が高い。とくにチョコレートやキャンデーや、ガムを食べてる女優にくらべると新高の場合はアタマがいい。実質的ですねえ。

★

美矢かおるの自宅にこのほど、二十五、六才位の男から電話がかかってきて

「あなたのパンティとブラジャーを送ってほしい」

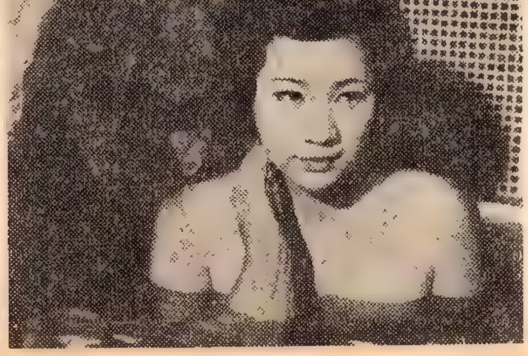
「もう顔が赤くなっちゃってすぐさま受話器をおいちゃったけど……」と美矢。周囲から「それほどキミはセクシーな魅力があるんだよ。洗タクしてたのを盗られなかっただけでも幸いだったよ」

と慰められたり、おだてられたり。春近し…女優さんたちよ、下着にご用心。

★

「007は二度死ぬ」の日本女性出演をめぐって、誰が起用されるかで話題となっているが、ピンク映画の内田高子がはやくも立候補し「日本女優のイキのよさを示したい、どんな条件にも応じます」と大ハリキリ。これと対抗的なのが、東宝の浜美枝、日本人離れのした肢態と、〃007シリーズ〃が東宝系で配給しているところから、どうやら内田対浜の決戦、という色が濃い。さて〃ボンド・ガール〃は誰になるか……。

美矢かおる



●上半身の[illegible]色[illegible]しい津島恵子、[illegible]
[illegible]
手拭いで巻き、髪を洗う場面はハッとする美しさがあつた。そして木村功とのラブシーンも野生的な魅力であつた。3月29日国立近代美術館（地下鉄・京橋駅下車）の講堂でリバイバル上映される。午後2時から入場料50円、学生30円

宮城県は鳴子の近にある「川渡温泉」は、鳴子の影にかくれてそれほど宣伝されていないが、それだけに、東北ならではのローカルムードがいっぱいだ。

観光ホテルと称する一流旅館でも、入口こそ男女別だが大風呂は全て混浴、まだスレていないところだけに、女性もかくしながらといっても胸だけ。ここならどこの宿へ泊っても、健康的なヌードが誰れにでも満喫できる。

☆ ☆

昔に変らぬ赤線地帯で旅行者の袖を引いているのが、広島市の弥生町・田中町界隈。街娼はもとより、ポン引き、タクシー受けとお盛んだが街頭でどうもという向きなら田中町の喫茶店「ミナト」へ入ってご覧、パン嬢で満卓で次から次へと誘ってきてお遊び二千円也。

この界隈の旅館、都内の旅館と違って、一人でも一人の料金で泊めてくれるが、転業旅館だけに部屋の半数は、パン嬢の下宿がわりとなっているため、風呂など入っていると、平気で入ってきてモーションをかける。傑作なのはいちいちコトがすむと、ナニを洗いに来る女が多いが、見ていても平気でバシャバシャとやっている。

オケは湯に入れてだから、浴槽につかっている分には気にならずとんだリラックスムードが楽しめる。

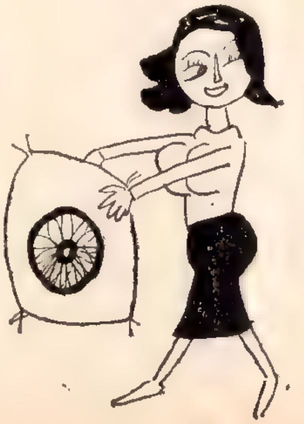
☆ ☆

東北の新興都市として、発展いちじるしい青森県の「八戸市」、漁港だけでなく、東北最大の芸者供給地の伝統をひいてか、いまもセックスはまったく開放的。

私娼よろしく、宿でもどこへでも参上してくれるのが、小中野のバー・飲み屋の女達。赤線とまったく変らず、旅行者なら気に入る女が見つかるまで、勝手に店へ入って選べばよい。そして、誘えばすぐ来てくれるが、店への罰金五百円に、遊び代千五百円の計二千円の出費。小さな店だけにその場ではできないが、冷やかしができる店などまったくありがたい。

☆ ☆

真昼の情事は如何が—、とオイデオイデをしているのが、川崎は市役所横を入った元赤線「堀の内」セット制による座布団オンリー。ユニオントルコ手前を左へ入った〃○〃第二国道ガソリンスタンド裏の小路の店などは、午後二時頃から。セットは酒二本、またはビール一本におつまみ。8時—11時のピークをはずして三千円、ラッシュタイムは四千円が標準料金。



酒を飲みながら冷やかしでというのは全然だめ、こみのセット料金だから、遊ぶ気がなくてもチャント酒二本おつまみでも三—四千円はとられる。とにかく昼間なら、化粧バケしていない女も選べるし、時間もサービスしてくれるだけにお遊びのアナだ。

セクシー女優

くちびるの美学

★目は口ほどに…

脣はその人の性格をあらわすーという。事実人相学上からいえば目と脣ほど、その人の人柄を表現している部分はない。しかも脣ほど人間の行動と生き方をハッキリと示す個所はないわけだから、目は口ほどに物をいいーともいうように口の方が実はさきの方でもあるようだ。

女性の脣はすぐセックスと結びつけたがる。あのくちびるはきっと味がいいぞとか、あのくちびるは好きな方だとかいわれる。それはウソではないようだ。

薄い脣は軽薄で情がない。厚い脣は情が厚く、セックスの度合いもすぐれているなど経験者はよくトクトクと語っている。

〝脣〟は男女の愛情を一番はじめに表現する個所である。接吻はその第一の手段になる愛の泉だーとある人がいっている。恋をし、相手を求めるときにまず熱烈なキスをし、接合する甘きくちづけ……どうやら甘い話にそれてしまったが、映画にみる女優の脣の表現、これはもっとも大切な道具になっている。

ピンク映画にキスのシーンがないのではさまにならないだけに、女優の脣の演技はもっとも大切である。しかもこれを美しく、そしてセクシーに気分をのせてとらえないことには、ショウバイにならない。

★キスシーンNO1

戦後、幾野道子と大坂志郎が、お互い口の中にガーゼをふくんで、戦後はじめてのキスシーンをやって話題となりつづいて奈良光枝と若原雅夫が「月夜の接吻」でさもキスをしたかのように傘のカゲでキス演技を展開してショックを与えたものだ。

いまにして思えば、一つの笑い草で、いまどき口の中にガーゼをふくんでキスをしたら相手にされないだろう。

ピンク映画に限ったことではないが、キスシーンではかなり大胆な場面がある。

さきにも「恐山の女」でのベッド・シーンで吉村実子と初恋の若い男が、キス演技を展開したところ、唾液が、十数センチも長く糸をひいて、ピカピカ光っていた。

リアルなのもここまでくればりっぱである。

最近は、ある女優が、

可能かづ子

谷口朱里（右）と新高恵子

城山路子

香取環

松井康子

「彼ったらね。グイグイあたしの口の中に舌を入れてくんのよ、嫌だったけど、しょうがないし、逆に噛んでやったわ」としゃあしゃあーという女優さんもいる。

★最高の唇は誰が…

ところで、唇のもっとも美しい女優さんは誰だろうか。ピンク系ではオーソドックスな形(日本的)なのに**城山路子**、**松井康子**らがいる。松井の場合はいささか切れがなく、顔の割りに小さいということ。じゃあの方も小さいだろうなどと推測されるところだが、それは唇の小さい女優はほとんど、比例している。

谷口朱里にはかなりセクシーなものがあるし、**内田高子**は現代的な奔放な性を感じさせる唇である。肉の厚さ、タフさをよく物語っている。

山本富士子の唇は日本の代表的な女の唇だ！と定評があった。切れのよさ、形のよさは申分なく、顔の長いのにくらべ唇はやや小さく、色と艶は美しかった。気の強さも秘められていて、すぐれた唇のサンプルといえる。

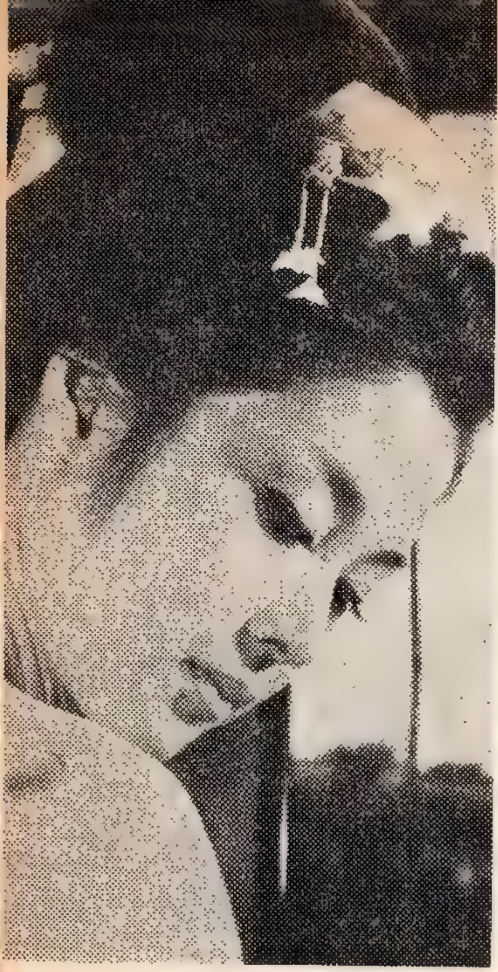
新高恵子の唇は、あまりカッコのいい方とはいえない。その角度によって美しい場合がある。見かけによらず、内面的なもの（精神的、肉体的なもの）はピンク系スターの中では抜群であろう。

★バイタリティーとは…

可能かづ子の場合はかなり性格が強く、どん欲に物事を吸収しようとするバイタリティのある唇をしている。

香取環もそれと同じ性格の唇といえるが、セクシーさでは**城山路子**が、一般的にモテる形をしている。

五社系の女優の場合はどうだろうか。**若尾文子**の唇は一番日本の女性に多い唇の形だ


若尾文子

江波杏子

浅丘ルリ子

が、若尾自身、かわっているのは性格がきわめて地味で世話好きな性格を物語っている。日本の女優を代表するトップスターになったのも、実はベッド・シーンの場合、半開きになった、なんともいえないカッコのいい唇が、男心を大いに刺戟する秘密があるのである。

その点、**江波杏子**の場合はかなり、都会的な唇をしている。奔放とみられる唇だが、案外日本の女性には少いケース。切れの長さ、奔放さは婦人科カメラマンが好んでモデルにする理由がある。

浅丘ルリ子の唇は実に子供っぽい。つまり可れんさがある。せっかく大人の演技をしても唇が可れんなので、〝おんな〟が表現し切れないウラミがある。

★お色気内蔵の池内…

池内淳子の場合は、これは浅丘や若尾と違って、おんなのお色気がたっぷりと内臓されている。上唇が比較的薄いのは情が薄いのか、割り切りがいいのか。頭悩的にすぐれた面をこの唇は表現している

緑魔子の場合は、これといった唇の魅力は感じられない男の子にもこれとよく似たというよりも、それ以上の美しい唇をしたものもいる。子供っぽさの抜けきらない唇、その性もいたって青くさい少女のおもかげが残って、映画に描かれるほどのセクシーさはない。

★オチョボロへの反逆！

変っているのは**加賀まりこ**厚ぼったくて小さく、とんがっているその唇、なにやら不思議な形である。

決してセクシーではない。だが、加賀の魅力はやはり現代のモラルを破壊し、奔放なセックスを求める唇を代表し

加賀まりこ

池内淳子

緑　魔子

新珠三千代

ているのだ。古来美しいとされてきたオチョボ口に精一ぱい反逆している、生きのいい唇ではないか。

その点では**野川由美子**もそれに近く、厚ぼったい唇はいかにも肉感的で、野性的である。それと逆なのが、**岩下志麻、星由里子、倍賞千恵子**といったところ。

典型的なやさしい女の唇である。

厚くて意志の強そうなのが**岸田今日子**、これくらいの広さと大きさがあると、セクシーシーンにもグッと厚味がでてくる。決して美的ではないが生活感を感じさせ、舞台女優にピタリのものだ。

佐久間良子もその点、小さいながらも内容のいい唇として尊重されるし、テレビの「氷点」で人気のある。**新珠三千代**の場合は〃おんな〃を強く感じさせ、潔ぺきさ、芯の強さを示している。

そうした女の唇のベッド・シーンの魅力はもっとも監督にとって貴重視されるものだ。

いつも濡れているような唇よりも、濡れをみせない唇を濡れて光らせるところに、セクシーさがあるのではないだろうか。

★唇にもクレームが…

映画の中での女優のエクスタシーの表現はなんといっても〃唇〃が一番ものをいう。

歓喜に耐え、そして恍惚となり、思わず、唇が半開きになり、あえぐ表情、これが、その女優がみせる唇の演技である。

その唇のあけ方一つでもデリケートに状況が表現されているものだ。

最近は、映倫が映画のポスターを審査するときに女優の唇が開き過ぎているというので、「これは気分を出し過ぎているからダメ。口を締めたのにかえてくれ」

とクレームをつけたというのである。

この注意を受けた宣伝部氏は「これじゃうっかり口も開けてはいられないなあ」

と大いにボヤいてそのポスターは止むなく、口が比較的開いていない表情のもので作ったそうだが、近ごろはポスター、スチールに限らず、あんまり気分を出し過ぎた唇はカットされるらしい。

生理的に女はその時、唇を開放させるものだが、それがリアルであればいけないというのだから、女優もウカウカ唇もあけていられなくなってきた。

虫歯や、入れ歯のない限りもっともっと女優の美しい唇をスクリーンに表現させ、シネマ・エロティシズムのファンの要望に応えてほしいところだ。

根性の女優さん新高恵子

昨年の冬、新潟の雪深い山中にロケし、少しも音をあげず頑張り通した『雪の涯て』でデビューしながら、以後、どんなプロからの誘いもすべて断ってきた彼女だが、七月からこの道でやってみようと決意を固めてからは、まるで別人のごとき活躍ぶりだ。

七月から十一月の七カ月間に、出演本数がなんと十二本というのでも、いかに引っ張りだこになっているかが分るというものだ。

彼女を一度使った監督は、もう一度使ってみたい、という気持を起させられるというのも、彼女の〝女らしさ〟と、割り切りの良さに原因が大いにあるようだ。

仕事を離れた彼女に会ってみると、スクリーンから受ける感じとはまるで違って、ごく普通の女性である。というより、品のいい若奥さまといったほうが、あてはまるだろう。昭和十四年四月十八日生まれというから、決っして若いとはいえないが、この人なりのパーソナリティーが、年令のハンデをおぎなって、しかも、ピンク映画界では題材がおとなを対照としているので、彼女は貴重な存在といえるだろう。

芸能界入りしたのは、好きな歌から「東芝レコード」の歌手としてがそのスタート。芸名は〝藤田恵子〟と名乗ったが、この時代は余り恵まれなかった。地方公演とかキャバレーで歌うことが多かったが、その不遇時代に〝根性〟をうえつけられていったようだ。そんな時、新藤孝衛監督から洋裁店のマダム役にと望まれて、しぶしぶ出演したのが、香取環主演の『色と欲』だった。この時は、ちょい役でもあり、映画のおもしろさなど分ろうはずがなかった。一昨年の秋も終る頃だった。

役についてこの人ほど無欲なのも珍らしい。だが、与えられた役を、こんなに苦しみながら監督の演出に合うように努力する人も珍らしい。前にもふれたように、昨年の七月に一つの転機としてピンク映画界に身を投じたわけだが、いまや女優としての欲も、仕事への情熱も、すべてがおもしろくなってきたところのようだ。

それらを裏付けるかのように、今年に入ってからの仕事ぶりは、極力、本数を少なくして、出来るだけ閑を作るように心がけている。その上、その閑を、演技の勉強や日舞のけいこに活用している。この世界の女優（こう呼ぶには余りにもおそまつな人が多いが）さんたちは彼女を大いに見習って欲しいと思う、また今年の彼女が大いに期待できる点も、それらの根性にある

（後藤　敏）

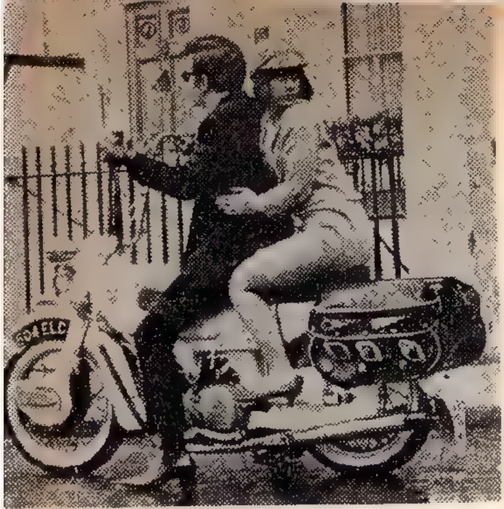
その時マバタキしないで

アタマを使った「ナック」のお色気

鈴木和夫

★なんともケッタイなご面相である。オードリー・ヘップバーンとかエリザベス・テイラーといった女優さんの顔を、いま一応美人の標準とすれば、リタ・トゥシンハムのご面相は、お世辞にも「キレイ」だとか「うつくしい」などとはいえぬ。サイズはソレほど大きくはないのだが、造作のすべてが大きい。

そのトゥシンハムという女優をガッチリ支えているのは、ズバ抜けた演技力なのだが、一九六五年度のカンヌ国際映画祭でグランプリ（最優秀映画賞）を得た「ナック」では、そのトゥシンハムが、実によく動かされている。ここが大事なところである。



「ナック」の一場面

★日本映画が「ツマらない」のは、「アメリカ映画のように、ゼニをかけないからだ」とよくいわれる。なるほど、それも原因だ。チャチなセットで作られたスペクタクル映画などは、まったく見ちゃアいられない。しかし、ナニも湯水のごとく金を使わなくても、面白い映画は出来るハズだ。そのことを映画「ナック」は、われわれによく教えてくれる。

★ナニもむづかしく考えることはないのさ。「もっとアタマを使え」ということだ。地球上のある場所から飛び出したロケットが、はるかかなたのお月さまに、どっこいしょとエンコをしようという世の中だ。いくら金を使って、おどろかそうとしても、もう、ちょっとやそっとではおどろかないように、観客の神経がきたえられてしまっている。

★例えばベッド・シーンだ。そこだけを見に来るお客さんもいるというのに、このごろはちっともドキドキ、ハラハラさせてくれないという声が多い。「ナック」にはベッド・シーンこそないが、ファニー・フェイスのトゥシンハム嬢が、それこそ〃まばたきも出来ぬ〃ほどタテ続けに、お色気をふりまく。ちょっと奇妙な味といえはいえるが、オートバイにどっかとまたがるところ、高い窓から出入りするところ、いやァ、アタマを使っとるねえ。

★どうも、このごろのメイド・イン・ジャパン映画を見ていると、作る方で〃チエの出しおしみ〃をしているように思えてならない。「人間の頭脳は、使えば使うほど発達する」という。どっかり積まれた札束を片っぱしから使う作業はだれにも出来る。手不足なら手伝おうという人も大ぜいいるだろう。

★例の「007シリーズ」にしても、このごろの面白い外国映画は、ヨーロッパで作られたものに多い。007などはかなり金をかけているが、やはり、面白さの根底に横たわるのは、アイデアの良さといえるだろう。映画はもっともっと、楽しく、面白くすることが出来ると思う。

ミスター陳のセクシー女優寸評

野末陳平

内田高子

内田高子　女優らしくない名前だが、本名かな。今みたいに有名になる前の彼女を、ぼくは知っている。

あれは五、六年前だ。たしか東和映画の宣伝プランの一つとして、ミスネグリジェコンテストとかいうのがあった。ぼくもその審査員の一人で、応募の女性みんなに、ネグリジェでしなしな歩かせたり、くどきのムードでため息を連発させたり、適当にピンク演技を要求し、採点の結果、一位、二位をきめたものだ。そのときの一位が内田嬢であった。

グラマーで、美人で、かなりセリフがしゃべれて、あの頃からシロウトばなれしていたが、果せるかな、コンテスト入賞後しばらくして、東芝からネグリジェ歌手としてデビューした。

転じて今はピンクスター。ぼくら審査員の目に狂いはなかったわけだが、当の内田嬢、先日ぼくと会ったのに、これはまたどうしたわけか、気がつかない。ムリもない。五、六年前の審査員の顔なんか覚えてないのがあたり前だ。がっかりしたが、ぼくは自ら慰さめた。

「タカコは近眼なんだ。でなけりゃ、記憶力の弱い女性なんだ。気にすんな」

扇町京子　この女性は、反対にすごい記憶力の持主だ。初対面は、熱海の旅館。彼女がカントクしたピンク映画のロケを拝見にいったときだ。ロビーで目があったとたん、彼女にっこりした。まだ正式に紹介されたわけでないのに、週刊誌かなんかでぼくの顔を知っていたらしい。

うれしいものですよ。ただの女優ではない。ピンク女優に挨拶されると、なんや知らず、どっかがピクピクしてきますなあ。とりわけ京子嬢は、金太郎みたいにまるまると肥えた健康優良児。脱ぎっ

ぷりも天下一品の勇ましさだから、話してるだけで楽しくなるような女性です。なんていうけど、ぼくがゆっくり彼女と話したのは、ほんの数分間。

たいていは彼女、ほかの男性と親しそうに話しちゃってるんだ。おお、ジェラシーのチンさんよ。

緑魔子　この人ほど、スクリーンのピンクムードと現実がかけはなれてる例は、ちょっと珍らしい。いつか週刊誌の対談で、新宿の喫茶店で待ちあわせた。約束の時間になっても、現われない。自宅に電話したら、とっくに出たという返事。

こっちは頭にきちゃって、席を立とうとしてふと見ると、小柄でジーパン、ゴムゾウリにサングラスという少女（？）が、一隅で雑誌を読んでいる。似てるな、と思ったが、まさかと思っていた。彼女が、マコちゃんだったのである。

「あたし、こういうスタイル好きなんです。おしゃれしようにも、豪華な洋服もってませんし、このラフなスタイルが私にはいちばん似あうし、魅力的でしょ？」

・着てなければもっと魅力的だよ、とぼくは言いかけたが、やめにした。スケベエだと思われたくないからね。一寸の助平虫にも五分の恥じらいはあるのである。みなさんとおなじでね。はい、またいつか……。

一 夜 妻 〈上映中 O.Pチューン〉

夫を愛しているのか？
異常にもえる偽りの愛撫

監督／山本晋也　主演／新妻悦子
製作／鷲尾飛天丸　■日本シネマＫＫ

ピンク映画みたまま

★今月は仕事に追われ、ピンク映画を大分、見逃してしまいましたが、どういうものかおピンク・スタアに次々にお目にかかれる機会を得まして、もう、こうなったらそうナメにナメちゃおうかと邪心を起している次第です。

★まずは東中野でお会いしたのが城山路子サン。「リズ」というバアのママさんですが映画でお目にかかった以上にグラマー。だけど、この前、本誌新年号でピンク・スタアの採点表をした時に、あまりいい点を差しあげていなかったせいか、はじめのうちは全然、剣もホロロ。俺は一体、何点つけていたのだろうとウロタエていたら、やがてニッコリ、ビールのお酌をしてくれました（ウヒヒヒって、とこよ）。

★可能かづ子サンとは「俺にさわると危いぜ」の撮影中の日活撮影所で――。もっとタッパがあると思っていたのですが、意外に小柄な身体つきで牝ヒョウのような顔つき。ブルドーザーにまたがってくれたり、セットによじのぼってくれたりすごくサービスのいい姐ごでした。

★奥野雅子サンといえば、あの「性カード」の主人公。ちょうど若松孝二監督の「お電話頂戴ね」の撮影の初日、目黒スタジオをのぞいたら、彼女はタイツ姿で熱演中。大きい風船玉をダッコしたりしてあの「体位」を暗示する場面を撮影中。ところが運の悪いことにその日の彼女は〝アンネ〟だった。ライトに当るとご気嫌斜めになって、ボヤク始末で、あまりサービスをして頂けなかったのが残念でした。

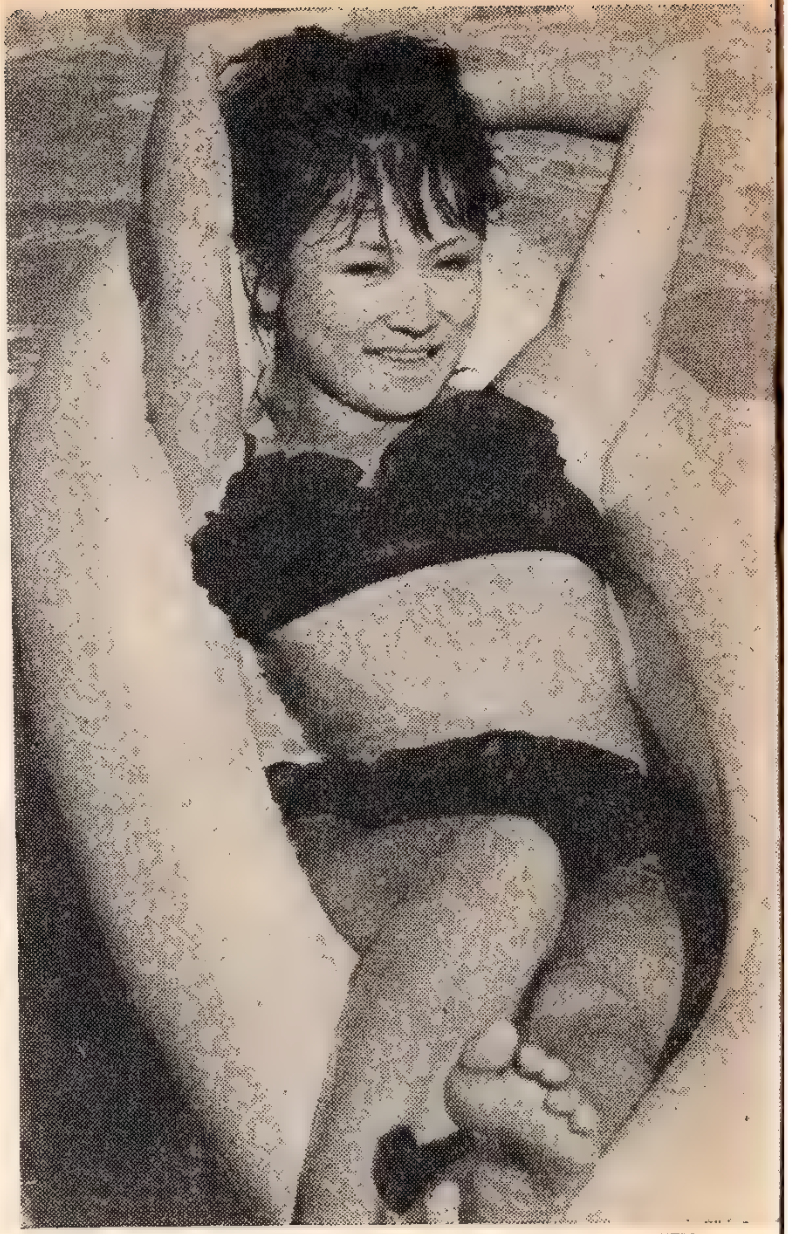
★さて、おピンク・スター訪問はこの位にして、今月の推選作は「女・三百六十五夜」という新高恵子主演のメロドラマがなかなかよかった。旅館の手伝いをしながら、そこのおやじに風呂場で犯され息子には酒を呑まされて一夜のオトギをし、仕方なく東京に働きにゆく。そこの工場主任のヤモメ暮らしに、ついつい同情――またまた同棲生活をするのですが、これがまた稀代の女蕩し、といった按配に、ホントにこの映画の恵子チャンは可愛想。しかし、彼女、ほんとにうまくなったな。大体、ピンクスタアは三、四本、つづけて主演するとおゼゼがガッポリ入ってくるせいか、急に艶っぽくなる。この映画の新高恵子は凄くチャームで、しかも主題歌も唱っているという仲々の努力賞ぶりでした。

「女三百六十五夜」

★清水せつ、香川あけみ主演の「女の狂宴」は、山奥の山荘に集まった三人のギャングと、二人の女ハイカーたちのもつれを描いているのですが女同志の同性愛場面などを入れてのアノ手コノ手の設定がつまらなくて一向に冴えない映画でした。

★おピンク・チェーンの炎加世子といわれそうな泉ゆりの「肉体の階段」は松井康子、香取環、湯川美沙などの応援主演があって、一応お色気は賑やかにはなっていましたがどのベッドシーンも似ていて、この種のものの手詰りを感じました。

〈佐藤重臣〉



プロダクション・ニュース

山路子主演で「夜の未亡人」をクランク中。3月29日からOPチェーンで封切の予定。〃未亡人〃とつく題名が多くなってきたようですが、新しくないですねえ。

☆

国映の4月上映作品は「足入れ」（監督岡野進）5月は「続・情事の履歴書」（監督向井寛）「処女無情」が予定されている。

☆

オリジナル映画の「罠を張る牝」（仮題、監督山本晋也）がクランク中。配給は日本シネマ。

☆

東京企画の3月配給作品二本が完成、また四月作品「おんな探偵日記」（仮題）もクランク中。

3月1―7日「しびれる喜び」（監督小角高治）主演内田高子、志摩みはる。22日「女高生秘話・十七才の体験」（監督小角高治）主演泉ゆり。

〃なんとか学入門〃というのがことしのブームになるらしい。日活が「エロ事師たちより・人類学入門」につづいて、9月作品として今村昌平監督の弟子の磯見忠彦助監督が監督に昇進して「エロ事師たちより・経営学入門」を撮ることに決まった。そこで、それじゃあうちでは「エロ師事たちより・性哲学入門」を撮ろうといっているのが、国映の田坂宣伝部長。「女性週刊誌や婦人雑誌のセックス特集、トジ込み附録をそのままドラマ化したって映画になるよ」と企画をねる。これじゃセックス映画学入門がほしくなる。

☆

ゼネラル映画KKは銀座事務所のビル改築で、新宿区大京町十三（グロリアス・マンション）に移転した。電話（三五三）八九三三。

☆

ヒロキ映画の記録映画「血と涙と墓場」は東京が3月1・2週に公開されるほか、関西地区は梅田地下など十一館で3月5日にスタートした。ベトナム、キューバ、パキスタンなどの各地の動乱を記録したもの。

☆

葵映画は千葉隆志監督、城

ピンクこばなし

用意周到

ルイがマリアの家で話に夢中になっていると、いつしか外は台風になっていてとても帰れそうにない。

そこでマリアが言った。

「今夜は泊っていらっしゃいよ。家の人は旅行に行っちまって、私一人なの…」

するとルイは大喜び。だがマリアが寝室の用意をして応接間に戻ってみると、彼の姿がない。しばらくするとルイはずぶぬれになって戻ってきた。

「一体どうしたの?」

「いやね、家へパジャマをとりに行ってたんだよ」

純毛の手ざわり

ピンキー夫人は隣りのブラウン夫人に言った。

「うちの主人たら、ピンクのナイロン・パンティを私にはかせたがって困るの」

「あら、いいじゃない」

「だって…」

ピンキー夫人は顔を紅くして小声でささやいた。

「うちの主人はナイロンの手ざわりが好きなのよ。男の人ってみんなそうらしいけど、お宅のご主人は?」

「うちの人?」

ブラウン夫人はやおらこういいました。

「うちの人は、私の純毛の手ざわりが一番だって」

愛の証こ

地下鉄の中でジョゼットは、そっと恋人のアンリにたずねた。

「ねえ、私のことホントに愛してくれてる?」

「もちろん愛してるとも」

にっこり笑うアンリに、ジョゼットはさらに言った

「じゃ、証こをみせてよ」

「えッ!!」

アンリはあわてて答えた

「困るよ、そんな…。地下鉄の中でハダカになるわけにはいかないじゃないか」

わき見の理由

ロケット・ガールのマリーが踊りながらミレーヌにささやいた。

「ねえ、あそこをご覧なさいよ。あのお客ったら私たちのことを見ないで、まるでソッポを見てるのよ。アタマへきちゃうわ」

ミレーヌは答えようとしたが、ちょうどその時、列が入れかわって右と左へ離れてしまった。

再び二人がそばへよったとき、マリーが言った。

「今夜はまるでアタマへきちゃうわ。もう一人ソッポを向いてるお客がいるの」

するとミレーヌはマリーをたしなめるように言った。

「よくあることよ。あの二人はね。一人はスリで、もう一人は刑事なのよ」

間違えた翌朝

「おいどうしたんだい?」

「首が曲らないんだ―」

「寝ちがえたのかな?」

「いや、寝方は悪くなかったんだが、ベッドを間違えちまってね」

ゴージャス娘

上田一平

すっかりゴキゲンな生活をしてるじゃんか
トントン
いようハルエ久し振りだなあ
よしてよッ あんたとはもう縁を切ったはずよ
でももう二度と現れないって約束するなら…
するする この通りだ
わるいけどよく洗ってきて…
へへへうまくいった
あいかわらずキレイ好きなんだなあ
最近は特にね…
ついでに消毒して…

映画界の話題

不良感度の東映と松竹の女性路線

ことしの映画界は日本映画を二分する重要な年—と前号に書いたが、そうした現象面がはやくも現われてきた。

東映の岡田東映京都撮影所長が、

「いまは日本映画史上の最大の混乱期だ。ちょうど終戦直後の世相のようなもので、われわれはその混乱と貧困の中を必死になって大衆のため映画づくりをやっているのだ。まずこの認識が大切だ」（報知新聞）といっている。

〃混乱と貧困〃の映画界をうんぬんされて久しい。が、最近の現象はかなり深刻化している。そうしたさなか、日本シナリオ作家協会、日本映画監督協会、日本映画製作者協会の脚本家、監督、プロデューサーの三団体が映画の再建をめざして「日本映画懇談会」を結成した。

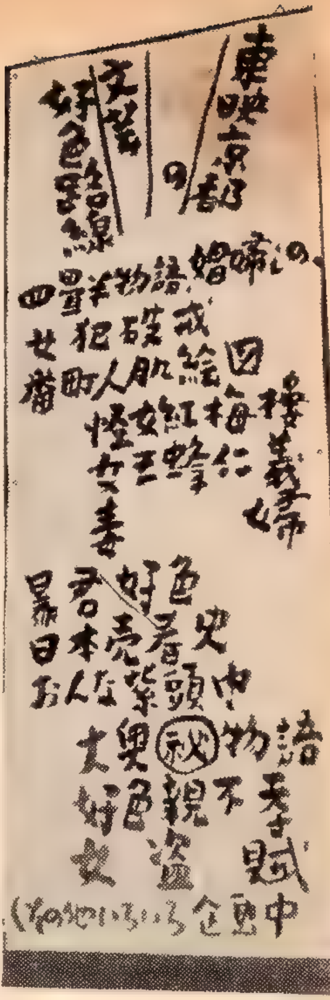
この会の目的は①日本映画に新しい出発点をもたらすために活動する②映画人も自己反省して日本映画の権威を新しいかたちで示すよう努力する③経営者に対して、映画づくりについての新しいビジョンを提出するの三点。

懇談会議長の八住利雄氏は「これ以上映画を低下させてはならない、関係者で新しい可能性をさぐる努力をするよう運動をすすめたい—」というのが、そもそもの狙いなそうだ。

そして一方では東映がヤクザとエロ路線にいっそうの拍車をかける—と意気ごんでいるのだから皮肉である。岡田所長の発言はきわめてハッキリしていて

「うちの文芸エロと仁侠ものはいいものだ！と断言はできないが、現に一部のお客に支持されている。一年に一本しかみてくれないお客より、月に三本みてくれる常客を大事にしたいですよ。いまは不良性感度の強いものが好まれている。社会全体、つまり政治も文学もそうなんだよ。映画だけがひとり〃清く正しく美しく〃と清潔でいられるはずがない。企業を安定させるのはピンクコメディーだ。当然のことじゃないですか。次の時代の映画づくりえの橋渡しだ」といい切りさらに「映画界復興のために私は不良性感度のチャンピオンになろう」となかなか勇ましい。

そして「四畳半物語・娼婦しの」につづいて「愛欲」「女犯破戒」「悪童・イタセクスアリス」「浮世床」「毒婦高



橋お伝」「番町人肌絵図」「怪女紅梅楼」「大奥秘物語」「累君好色」といったエロ路線がぞくぞくと待機している。

これとはまったく逆な立場をとっているのが、松竹、東宝の場合。松竹は成人映画の製作、配給をしないことをハッキリと決めたばかりだ。

製作、営業担当重役の白井昌夫氏の新方針で、創映プロ「黒幕」（監督小林悟）CAG製作「顔を貸せ」（監督湯浅浪男）の二作品をもって、成人映画を打ち切りとした。

成人映画スタッフの犠牲第一号となったのが、例の「医学カード」のモデル奥野雅子を主役にした「電話頂戴！」（監督若松孝二）。配給はさきに松竹と決まっていたのに松竹が急きょ、ことしの製作方針を女性映画中心に切りかえたことから、配給を中止した。

若松監督は「でき上ってしまってから、その種の映画（ピンク映画）は買わない方針だというのはひどいですよ。契約違反です」といっているがひとり若松監督ばかりではなく、独立プロ系が、企画を持ち込んだり、製作体勢に入っているプロはかなりの被害をうけたといわれている。

松竹はもともと首悩陣がかわると、ネコの目のように製作方針もかわるところだ。

さきの新基本方針発表の記者会見では白井専務が「映画を死守し、再建しなければならない。そのためには松竹本来の姿にかえって、日本映画ここにありという信念でやってゆきたい。観客増員をはかるには原則的には一般用映画を作ることだ。お客がお金を出して満足できるものを前向きにやってゆきたい」と説明した。

そこでことしのラインアップ二十一本の作品群をみると「暖流」「春一番」「紀ノ川」「男の顔は履歴書」「白昼の通り魔」といった作品があり野村芳太郎、中村登、市村泰一監督を上流に外部から商売になる監督として、井上梅次〈炎と掟〉石井輝男〈夜を狙え〉を導入しており、ほかに二本の作品を企画している。女性映画を中心にしたのは正月映画「暖春」がヒットしたことから、やはり松竹の進むべき道はここにあったと反省をしたのか後退したのか―このように落ち着いたわけだ。

さらに〝成人映画〟的な内容は総て甘くやさしい糖衣をかぶせて一般用にしてしまう、一種の逃げですよ」と白井専務が本心を語ったが、逃げというセリフを吐いたことはあきらかに後退を意味するのであるまいか。

しかも、ここ数年の松竹は映画企業としてはまったく失敗したにもひとしい低迷ぶりで、やっとそれを救ったのは「白日夢」「紅閨夢」「悦楽」「血と掟」の成人映画による大ヒットであった。完全に高売になる作品、しかも「白日夢」「血と掟」で社員のボーナスを支給したことまでいわれた。この種、〝成人映画〟をあえてボイコットしてまで清く明るく正しい〝女性映画〟と青春アクションものにきりかえた方針は果してどういうことなのか。東映の不良性感度映画と松竹の女性路線、その結果がまことに興味深い。

ズバリ発言

人間不在を反省しよう

新藤孝衛

★忘れた大切な問題

日本映画の衰退がいわれてすでに久しい。レジャー産業の発達とか、テレビの普及とか、外国映画(主にアメリカ)の大型化による脅威とか、理由はさまざまにいわれている。だが、こうした既成映画人による発言は、一番肝心なところを忘れて、(あるいは忘れたふりをして)はいないだろうか？　自分たち映画界内部の人間の問題である。いまさら映画史を云々するまでもなく、映画は近代文明の産んだ産業の一つである。だから、過去の映画人(いわゆるカツドー屋)は自ら新時代の人種であることを誇り、その意気当るべからざるものがあった。だが、ここに極めて奇妙な現象が起りつつあった。カツドー屋が新らしき部落を自負し、それらしくカッコよく振るまっているうちに、何時の間にやら世間は通り越してしまっていて、自らは井のなかの蛙になっていたのである。蛙共は「興収」によってそれを知った。さて、一大事！と大騒ぎをはじめたが、如何せん、肝心のことを思いつくには、部落生活は永過ぎたのである。古い頭でツラツラ考えてみれば、テレビが憎い、レジャーが憎い……。なぜその古い頭について考えなかったか？　誠に奇妙な＜映画人の感覚＞である。

★成長する＜異端の子＞

この映画人内部の問題に、ボクは、いわゆるエロダクションといわれる第三勢力の発生と、その過程の総ての理由があるように思う。彼らは自ら産んだ＜異端の子＞がだんだん成長し、自分達を脅やかすまでに至ると、これに＜罪の子＞の汚名を着せて葬り去ろうとした。前述の蛙の論理である。自分たちの罪について考え、対策を考えることをなぜしなかったか？　いや、さらにひどいことにはその異端の子のあとを追っかけ出したのである。また変なタトエ話しが出て恐縮だが、鶏と卵というのがある。どっちが先か？　というあれだ。どっちだって別に構やしない。要は卵が親になった時、また卵が出来るということだ。映画界ではこの卵が不思議と元の親であったという。なにやら坊主のお説教にでも出て来そうな怪談であるということだ。お蔭で＜異端の子＞は大きな顔をして歩けるようになった。

すべてそういうように、われわれは邦画五社の援護と協力のもとに、現在に至ったのである。あらためて誌上を借りてお礼を申し上げる。

しかも、われわれは＜異端の子＞であるがために、親から受け継がせてもらった＜遺産＞はなかった。これがボクの＜新らしい映画の旗手＞になり得るかも知れない――と自負するところだ(このなり得るかも知れないについては後で述べる)。

★性解放へ便乗して…

戦後、押しよせた＜自由主義＞の風潮のなかで、最も顕著なのがアメリカナイゼイションという現象である。それはいままで奥の間の営みであったセックス行為を、白昼しかも、人の眼前ですら行なわ

せるようになった。この性解放に映画界も便乗した。だが、彼らが描いたのは〈性の解放〉であって、その行為に至る〈人間の解放〉ではなかった。無理もなかった。日本人自体、誰もが〈性の解放〉だけを受け取り、そこに至る〈人間の解放〉に就いてはトンとなおざりにしていたからだ。日本の近代化はつねにこうした表面だけの猿真似という型をとって、行なわれて来た。戦後もまた例外ではなかった。

だが、事実がそうであったからといって、映画がその社会一般の水準のなかに自らも定着し、同化していてよかったのであろうか？　ボクの貧しい知識によれば、明治文学に於ける〈リアリズム運動〉が、その根底において間違っていたことは〈現実改革の意志〉を持たなかったことだ。リアリズム文学の堕落と衰退は、その時に位置づけられていた。

同様、基本的問題を置き去りにした〈性解放映画〉が、〈公開ブルー・フイルム〉に堕し去ることも当然の帰結であった。所詮、それは古いモラルと古い設定と、古い意識によるセックスのみの映画であった。しかも、なんらの〈意志〉をも持たないということは、観客に迎合するしか観客を引き留めておく力を持たない。

★迎合から堕落の道を…

映画がその特性として有している〈大衆性〉は、ここに於て逆に、〈啓蒙性〉ではなく、〈迎合性〉となるのだ。映画の堕落はむしろ大衆に率先して行なわれた。こうして日本映画の性公開はどんどんその露出度を深めて行った。ここに第三勢力の台頭があったのだ。すなわち、ここには三つの意味がある。

その一つは〈性〉のみを描写するなら、余計なお体裁にしか過ぎない描写は不必要ではないか？　第二に高額なギャランティを要するスターや大監督は不必要ではないか？　第三に旧態のままの大掛りな撮影は不必要ではないか？　これはもっともな合理的な考えである。

当時、日本映画の動脈硬化に愛想をつかし、しかも、老巨匠尊重の事大主義に前途をはばまれている若い映画人がいた。彼らはこぞってこの新陣営に走った。

若いエネルギーが全く異なった映画作りを始めた。小数のスタッフと、いままでの四分の一程度の製作費、いっさいの虚飾を廃して行なおうとする創作態度である。

ここには大きな可能性の萌芽があった。大事に育て上げるべきであった。と、ボクは内部の人間として声を大にしていう。（**映画監督**）

（つづく）

■バックナンバーをご希望の方は今がチャンスです。お早めにお申込み下さい!!

★愛読者からのご希望にお答えして、バックナンバーを用意しました。

七月創刊号、八・九月合併号、十月号、十一・十二合併号、新年号、二月号、以上の六種類があります。しかし何分にも部数に限りがありますので、ご希望の方はお早くお申し込み下さい。

★お申し込みは左記のとおりです。

東京都中央区銀座東六の四　村木ビル五階　現代工房「成人映画」編集部定価は一部各百円、送料一部十円。

ご要望にこたえてふたたび登場

特別アンケート ピンク女優が寝るとき
―第二回―

前回の「ピンク女優の第一線スターにアンケートをこころみた「ピンク女優が寝るとき」が、なかなかの反響をよびましたので、「第二回目をおおくりします。
映画で熱っぽく、あるときにはセクシーにベッドシーンを展開してみせる彼女たちも、わが家、わが〃ねぐら〃にかえったときはつぎなる状況となるわけです。

〈城山路子〉
本名…光岡早苗
住所…中野区城山町
スタイル…身長／162　体重／45　バスト／86　ウエスト／60　ヒップ／95
代表作…「肌のあやまち」「女の性」「夜ごとの牝猫」「未亡人日記」「よろめき」ほか。

①寝る時はフトンですか、ベッドですか。
日本式、マットレスの上にフトン。

②パジャマですか、ネグリジェですか。
パジャマです。五、六枚交替にします。

③パンティははいて寝ますか枚数と色は。
もちろんはいて寝ます。現在四十枚位持っています。

④香水やオーデコロンは何をつけていますか。
香水マニヤなので、色々です。

仕事中はオーデコロン。ドレスアップした時は香水をつけます。

⑤寝る前に何をしますか。

まず第一にフトンの中で夕刊を読みます。

⑥ことしの目標は。

恋人を作りたい。家を建てたい。もっとやせたい。収入をふやしたいとか、この中で一つでも実現出来ればと思っております。

城山路子

南たまき

★

★

＜南たまき＞

本名…大森 環

昭和22年7月27日生

住所…渋谷区美竹町四一
中条ビル

スタイル…身長／160 体重／50 バスト／90 ウエスト／60 ヒップ／95

代表作…「ねらわれた女達」「みだら花」「裸の餌」「狂熱の女」ほか。

①寝る時はフトンですか、ベッドですか。

いまはフトンでねていますが、これからはベッドにしたい。フワフワした方が気分もいいので。

②パジャマですか、ネグリジェですか。色は。

ネグリジェです。冬はロング。夏はショート。色はピンクなの。

③パンティははいて寝ますか枚数と色は。

もちろんはいて寝ます。でもボーイフレンドがいた場合は別。

④香水やオーデコロンは何をつけていますか。

キスミーの香水をつけています。

⑤寝る前に何をしますか。

台本を読みます。そしてタバコを喫います。

⑥ことしの目標は。

仕事を大いにやってゆきたいわ。恋人はいますけど、今はまじめに仕事をし、収入をふやせるほど、芝居がうまく

なりたい。

★　★

＜枡田　邦子＞
本名…枡田邦子
昭和14年10月2日生
住所…新宿区諏訪町二三六
栗原方
スタイル…身長／164　体重／53　バスト／90　ウエスト／62　ヒップ／94
代表作…「死ぬほど抱いて」「ねらわれた肌」ほか。

①寝る時はフトンですか。ベッドですか。
冬はエバーソフトの上にフトン。夏はエバーソフトにシーツだけで寝ます。
②パジャマですか、ネグリジェですか。色は。
ネグリジェで、主に赤系統
③パンティははいて寝ますか枚数と色は。
もちろんはいてねます。
④香水やオーデコロンは何をつけていますか。
冬はタイガー。夏はソワルドパリーをつけています。

枡田邦子

⑤寝る前に何をしますか。
仕事の疲れをいやすため、マンガの本をかならず読んで寝ます。
⑥ことしの目標は。
まず貯金です。

★　★

＜橘　桂子＞
本名…橘　桂子
昭和20年11月5日生
住所…川崎市本町一ノ一ノ七
スタイル…身長／158　体重／42　バスト／84　ウエスト／55　ヒップ／85
代表作…「夜のいたづら」「絶倫」「ヒップで勝負」「鉄火芸者」ほか。

①寝る時はフトンですか。ベッドですか。
お気に入りのピンクのフトンでタタミに寝る方が好き。
②パジャマですか、ネグリジェですか。色は。
ネグリジェです。ピンクのロングと七分。ホワイトの七分です。
③パンティははいて寝ますか枚数と色は。

橘　桂子

もちろんはいて寝ます。現在五十枚位あります。

④香水やオーデコロンは何をつけていますか。

普段は自分の体臭だけで、何もつけません。夏だけオーデコロンを使います。

⑤寝る前に何をしますか。

読書。日記は必ず書いて寝ます。

⑥ことしの目標は。

昨年はがむしゃらに仕事をしてきたが、今年は一本一本の仕事を生きがいのあるものにしたい。また今年成人式を迎えたので、がっちりした計画の上に仕事と私生活をたて直してみたいと思っています

★　★

香取環

＜香取　環＞

本名…久木登紀子

昭和14年10月21日生

住所…新宿区戸塚四ノ七七九　光和荘

スタイル…身長／164　体重／60　バスト／98　ウエスト／62　ヒップ／98

代表作…「肉体の市場」「色と欲」「肉体女優日記」「性宴」ほか。

①寝る時はフトンですか、ベッドですか。

ベッドです。ボリュームがあるので、セミダブルにしています。

②パジャマですか、ネグリジェですか。色は。

パジャマ。おもにピンク系が好きです。

③パンティははいて寝ますか枚数と色は。

ノーコメント、想像にまかせます。

④香水やオーデコロンは何をつけていますか。

ミツコを愛用しています。一番自分に合っていて楽しくさせるから。

⑤寝る前に何をしますか。

レコードをききながら読書して寝ます。

⑥ことしの目標は。

たった一人きりで、しずかなところへ旅行したいといつも思っておりますが……。

★こんどのアンケートで一番うれしかったのはすぐさま回答をよせてくれた女優さんたち。こんなわずかなことでも誠意をみせてくれるのはやはり人柄ということになりそうです。重ねて感謝します。

★それにしてもアタマにきたのは、ロケさきで西朱実と会ったので「例のアンケートお願いします」といったらいい草がフルっていた。「一切そういう変なことは止めました」。アンケートが変なのか、「成人映画」が変なのかいわなかったが、「成人映画」に出演している人も変なのか。じゃご自分はどうなのか?。これも毛並みは争えないことでしょうね。

★アンケートをよせてくれなかった人たちもいろいろ忙しいことでしょうが、今後もこの種の企画にご協力下さい。

★O・Pチェーン 2・4月番組				★独立チェーン 3月番組	
3/1―7	嵐の女体（大蔵映画） 乱れた夜（関東映配）	3/29―4/4	性病の恐怖（大蔵映画） 黄色い太陽（葵映画）	3/1―7	しびれる歓び（東京企画） 熟したつぼみ（三映社）
8―14	よろめき（関東ムービー） 一夜妻（日本シネマ）	5―11	女体爛熟（ヒロキ映画） 婚前交渉（日本シネマ）	8―14	汚れた夫婦（センチュリー） 軟派（新東宝）
15―21	多情（ヒロキ映画） 女の合鍵（関東ムービー）	12―18	昼間は嫌よ（関東ムービー） 危険な同棲（明光セレクト）	15―21	人妻がもだえるとき（センチュリー） 未定（六邦映画）
22―28	性のこまぎれ（大蔵映画） 魔性の人妻（明光セレクト）	19―25	女体銀行（日本シネマ） 色ざんまい（関東映配）	22―28	多情な女（東京企画） 女か男か（新東宝）

編集後記

★寒さも空ッ風もなんのその、熱気あふれる編集室は厳冬のきびしさなどどこ吹く風で今月号もどうにか無事編集を完了。と同時に、果たして今月号も皆さまのご要望におこたえできたかどうか、それが心配で身体の中を冷い風が吹きぬけた感じ。ロケルポと特別アンケートが二大特集として売り物なのだが…（E）

★表紙に谷口朱里、ピンアップに新高恵子とお忙しい二人にお願いしました。「成人映画」の表紙にならいつでも協力しますわ、といわれ大変うれしかった。「私はピンク映画に抵抵を感じるの」といって、アンケートにも応じなかった西朱実とは対象的だった。新高、谷口両嬢に感謝します。（K）

★少しお遊びがほしい一というので、上田一平氏のゴージャス娘のマンガを連載、アナ場情報のY談風上記、ピンク小ばなし、そしてズバリ発言を新藤監督にお願いして2回の連載など、内容充実を図ったつもりです。陽春にはセクシー女優のエロテイシズムを集大成した別冊増刊を企画中。ご期待下さい（X）

●「成人映画」第2巻第3号　昭和41年3月1日発行　定価100円 編集兼発行人川島のぶ子　発行所／東京都中央区銀座東6の4　村木ビル5階　現代工房 電話(541)3798

★今月のスクリーン・ハイライト

砂の穴（六邦映画）

監督・深田金之助　　主演・藤　三恵子

美容師見習いの真紀子(藤三恵子)は友人から青年を紹介されバラ色の幸せだったが、それはコールガール組織の罠だった。救いのない泥沼の世界に入ってしまう。

やさぐれ処女

（ゼネラル映画）

監督・甲斐精二　主演・水城リカ

恵美子（水城リカ）は母と二人暮しの平和な家庭だった。ある日、母のみだらな姿を見た恵美子は処女の潔癖性から家出してしまう。家出した彼女の前にはいろいろな事件がまちうけていた。

女の狂宴（センチュリー）

監督・渡辺　護　主演・清水せつ

弓子（清水せつ）と保子（香川あけみ）は別荘に遊びに来た。東京から強盗犯人三人組が行方をくらますためこの別荘にやって来た三人のギャングと女性二人の間には……。

官能の虜（新東宝）

監督・神崎誠四郎　主演加賀みどり

ゆき（加賀みどり）はたった一度の過ちで田舎をとび出し、男の欲望の餌となってゆく。男から男へとヒモの食い物にされ、希望もない絶望の十七才の青春、娼婦ゆきの姿を描いている。

つれこみ（新東宝）

監督・内田　宏

都会は他人の集団である。他人が他人でなくなるのに便利な場所はたくさんある。カメラの眼が捕えた彼らの夜と朝の行動を尾行したドキュメンタリードラマ。

乾いた処女（国映）

監督・梅沢　薫　主演・志摩みはる

大谷牧場の女中千代（志摩みはる）は健康で明るい毎日を送っていた。彼女をめぐって流れ者の運転手、主人、獣医が高原をバックに欲望の世界を展開する。

悪女日記（国映）

監督・向井　寛　　主演・奈加公子

　ダイヤモンドをめぐって洋子（奈加公子）と志津子（丘百合子）の二人のギャングかくりひろげるお色気アクションドラマ。

ザ・ガードマン（大映）

―― 東京忍者部隊 ――

監督・弓削太郎
主演・長谷川待子　成田三樹夫

大映には若尾文子以外はおとなのオンナのお色気を感じさせる女優はいないのか—と思っていたら、長谷川待子がいた。「東京忍者部隊」で成田三樹夫との悩ましい肢態とベッドシーンは、これからの彼女に注目したい。

あばずれ（東映）

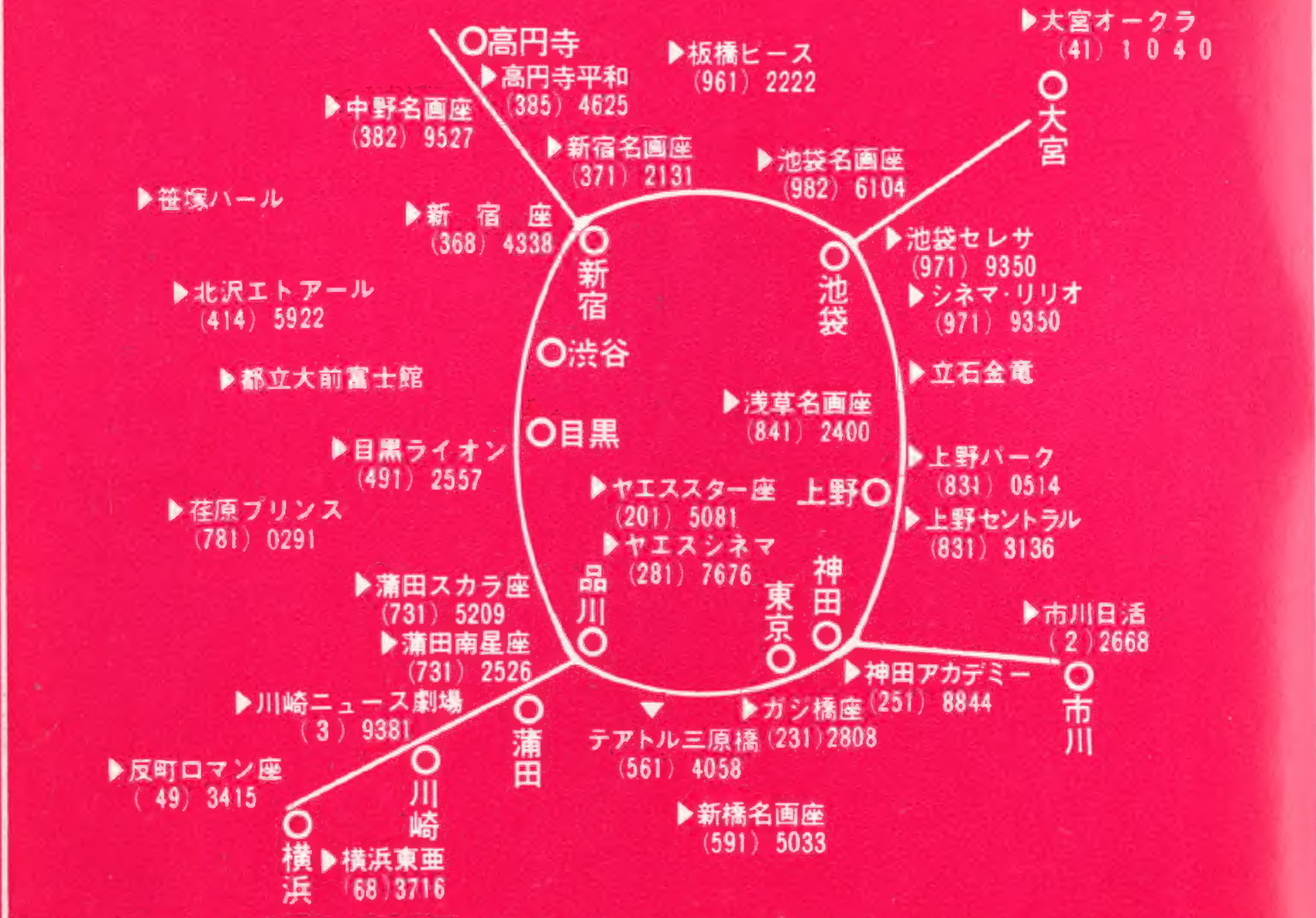
監督・渡辺祐介
主演・緑　魔子　山本豊三

世間知らずの小娘が夢を抱いて飛びこんだサーカス一座は、さまざまな過去をもった男と女の醜い葛藤の場であった。欺むかれ虐げられた彼女、しかし一人の男を愛するようになった。が、それもつかの間、恋の芽はつみとられ転落していく…

★フレッシュなグラマー／ラッケル・ウエルチ

最近のハリウッドでは、これといって目ぼしい女優さんのニューフェイスが発見されていません。しかし、ここに登場したラッケル・ウエルチはルックスもお見事なら、そのプロポーションのほうも、なかなかのグラマーぶり。きりっとした顔つきとひきしまった肢体は、第二のアーシュラ・アンドレスという呼び声も高いそうです。

関東地区成人映画上映館一覧表



大阪地区成人映画上映館

大阪駅

東淀川区
▶十三若草劇場 (301) 5929

北区
▶天六映画劇場 (351) 9138

都島区
▶都島会館 (951) 4651

天王寺区
▶鶴橋松竹 (761) 9752

守口市
▶守口セントラル (991) 0049

福島区
▶吉本キネマ (451) 6793

城東区
▶放出シネマ (961) 0664

布施市
▶布施映劇 (722) 2845

西淀川区
▶野里リボン座 (471) 1082

阿倍野筋
▶阿倍野名画座 (641) 5885
▶千日前オリオン座 (641) 5477
▶千日前新オリオン座 (641) 5477

難波

名古屋地区成人映画上映館

○浄心ハイツ (531) 4118
○上飯田劇場 (991) 5714
○守山瓢映 0560-(79) 2082
○栄生グランド劇場 (551) 6379
○タカラ劇場 (941) 6076
○堀川映画劇場 (231) 0193
⊙今池フジ (731) 4763
○太閤劇場 (551) 2353
⊙テアトル希望 (541) 3044
○曙文化劇場 (731) 3806
⊙日活シネマ (241) 2345
○鶴舞劇場 (881) 8494
⊙名画座 (231) 3211
○雁道劇場 (881) 8069
○日比野東映 (671) 0407
○八熊文化劇場 (321) 8194
⊙南映画劇場 (811) 4906
○新郊劇場 (811) 2730
○名港文化劇場 (661) 1269
○名南劇場 (811) 6586

同時上映●3月大公開

製作/矢元照雄
国映株式会社
国映

月刊「成人映画」第二巻第三号 昭和41年3月1日発行 編集兼発行人 川島のぶ子 発行所/東京都中央区銀座東六の四 村木ビル五階 電話(五四一)三七九八 現代工房 定価百円